聖ゲオルギオス教会（右）は、ラリベラの教会群のなかで最後に建てられたモノリス教会と考えられている。1210年頃の建築だが、保存状態は良好で、教会群を代表する聖堂である。赤い火山岩を掘り下げて築いた教会堂は、高さが12メートル近くあり、深く掘られた中庭に立っている。他の聖堂同様に、教会として使われている（下）。

文 **ロバート・ビーヴァン**　写真 **ジョエル・テッタマンティ**

もうひとつのエルサレム

エチオピア高原の丘陵の頂に、エルサレムがある。砂岩質の地面を深く掘って築いた教会堂が点在する風景は、まさに神秘的だ。

オリーブ山からヨルダン川へ大地がなだれ込むところに、1本の木が立っている。枝に青銅の鐘がひとつ吊り下げられているが、鐘を鳴らす舌は、折からの酷暑になすすべなく沈黙している。シナイ山正教会の前を裸足の少年が通り過ぎていく。肩に巻いた真新しい山羊の毛皮には、動物の蹄と頭がだらりと垂れ、少年の背中でカチカチと乾いた音を立てている。まるで聖書のなかの一場面のようだが、これはエチオピアの山間にあるラリベラという町の現在の風景なのだ。町の名は、13世紀の司祭王に由来している。エチオピアは、世界最古のキリスト教国のひとつとして知られ、古くから聖地エルサレムへと続く巡礼の道が整備されていた。それがイスラム教徒によって閉ざされた時、王はこの地に第二のエルサレムを建設しようとしたのだ。

首都アディスアベバの喧騒を逃れて北へ約350キロ。かつてラリベラ王が治めた神聖な風景のなかに、エチオピア正教会の11の聖堂が点在している。そのなかには、自然の岩を刳り抜いて築かれたものもある。教会堂は深い堀や橋、あるいは儀式に使われる地下通路でつながっている。前からあった洞窟を利用したものもあれば、赤い火山岩の一枚岩を丹念に刳り抜いて築いたものもある。壮麗な佇まいのメドハネアレム聖堂（聖救世主教会）は、高さが12メートル近くあり、岩窟教会としては世界最大の規模を誇る。岩を彫って築いた教会堂は、円柱にアーチ、そして窓やドアも備わった完全な姿で立っている。

ラリベラの教会群がどのように建設されたのか、残念ながら確かなことは分かっていない。これまでに考古学者による本格的な調査は行われていないが、このエチオピア北部一帯には、紀元1世紀にアクスムというキリスト教の王国が栄えていたことが知られている。紀元900年頃にアクスムが衰退すると、ザグウェというキリスト教の王朝が台頭する。ラリベラはザグウェの首都で、当時はロハと呼ばれていた。この驚くべき教会群は、ザグウェ朝時代のもので、1180年から1220年頃にかけて君臨したラリベラ王が一代で築いたと伝えられている。その業績を称えて、この地はラリベラと呼ばれるようになったのだ。今日でも教会の聖職者たちは、聖ゲオルギオスのお告げを受けたラリベラ王が、建築の天使たちの助けを借りながら、23年の歳月をかけてひとりで築いたのだと信じている。聖ゲオルギオスが降臨した証として、聖人が乗って現れたという馬の蹄の跡が、今も岩に残されている。

しかし、時と共にこの幽玄なる教会の町は寂れ、優美な彫刻で飾られた岩屋や地下通路に容赦なく土砂が堆積していった。忘れられた教会群は、19世紀後期に半ば大地に埋もれた状態で再発見され、再び礼拝が行われるようになった。現在はユネスコ世界遺産に登録されているが、内部は風雨による浸食が進んでいる。そのため、仮設の天蓋で覆われ、修復作業を待っている状態だが、教会として日常的に使われている。

教会堂にはそれぞれ守護聖人が祀られ、聖なる書物がある。香の煙が立ち籠める暗がりを陽光が貫き、守護聖人の肖像を照らす。聖ゲオルギオス教会の華麗さは傑出していて、ルネサンス期に腕をふるったヨーロッパの彫刻家たちの仕事さえ中途半端に思えるほどだ。地下に深く沈み込んだ中庭に聳える3階建ての十字型の建物は、ノアの箱舟を象徴していて、屋上がちょうど足元の地面の高さにある。聖堂のなかに入ると、眠たげな目をした司祭が、至聖所に面して引かれたオレンジの金襴の幕を背にして立っている。ひとりの男が司祭の前に跪き、優しく囁くような祝福を受け、床にうずくまる。男の頭は、司祭のローブの裾にすっぽりと包まれている。

アディスアベバからラリベラへは飛行機で行くこともできるが、車で2日かかる陸路の方が、エチオピアの精神的な中心地であるこの地域をより深く理解できるだろう。アディスアベバに立つ王冠を戴いたユダのライオン像から、ラリベラ空港のごみ箱に施されたアクスム特有の文様まで、宗教的象徴が遍在するこの国では、昔から変わらぬ風景のなかで、伝統が脈々と息づいているのだ。✤

「パテック フィリップ マガジン・エクストラ」（patek.com/owners）にて、この記事の特別関連コンテンツをご覧いただけます。